

て退散せしもの也。三州名跡誌に、武佐の廣濟寺は、昔本源寺御堂今の城中に有之時、江州武佐より引越す御堂番也。毎年二月朔日二日縁起披露ありと。或は云ふ、廣濟寺の舊地は、西町元算用場の地なり。明治十一年の夏、尾崎神社をば元算用場の地内へ移轉して社殿造營の時、土中より阿彌陀如來の畫像を六幅掘出せり。六幅の中三幅は既に腐朽すといへども、三幅は尙依然として金彩なども存在せしゆゑ、表装を加へらるゝと也。此の佛像は往昔廣濟寺此の地にありし頃の遺佛なるべしといへり。按ずるに、金澤城本丸の廣間は、本源寺の御堂を其の儘利家卿用ひられし處、本源寺の本尊阿彌陀の像を棟木に結び付けありたるよし、關屋政春の古兵談等に見ゆれば、廣濟寺の佛像をば土中へ埋め置きたるも、天正八年尾山落城の時なること知られけり。

○御小人橋

金澤橋梁記に、御小人橋御小人町とあり。或は云ふ。此の橋は御小人町の末奥村氏元下邸の入口なる小橋ならんか。今は此の橋名を稱せずといへり。

○御小人下町  
此の町は、御小人町の後、地にて、此の地も往昔は御小人の組地にて、後々までも數名居住すといへり。

○越中町

龜尾記に云ふ。御小人町と横山氏下邸との間、行留りの町をば越中町と云ふ。越中町も御小人下町なりといへり。今按ずるに、改作所舊記に、萬治三年五月長柄御小人三百人召抱に付、加越能三ヶ國郡割になし、戸數高に應じ、某郡は御小人何拾何人當りとて、人高を割當して召抱えられたるよし見ゆれば、御小人町の御小人といへるものも、そのかみ三ヶ國の邑民を抱えられ、越中の者共の居住地を越中町と呼び、能登の者共の居住地をば能登町と呼びたるにや。長柄町の近邊に能登町の名あり。

○高道

御小人町の裏にて御小人下町邊なりと。卯辰邊にも今高道町といふあり。むかしは此の地邊卯辰山の麓なる荒地にて、小高き道路なり。故に高道の名ありと、龜尾記にいへり。されば御小人下町邊なる高道も、同意の名稱ならんか。

今は高き地に非ずといへり。

○梅檀屋敷

或は云ふ。材木町に石見屋とて藥種店あり。此の後、地は、舊藩士和田左兵衛と云ふ人の舊邸の尻地にて、昔より梅檀屋敷と呼べり。いにしへ、此の地に梅檀の大樹ありしといひ傳へたり。右梅檀の根株とて土中より掘出せり。此の地はいかなる地なりけん、昔より折々怪異の事共ありといへり。天保年中堀覺之丞と云人、和田の邸地と合併す。其の頃迄は石見屋の後は小路ありしかど、此の小路を廢し一邸地となし、が、明治廢藩の際堀氏も退去して、明地と成りしを、石見屋等請込、今は其の地の怪異も詳かならぬ如く成りたり。従前の梅檀屋敷も、元は一士の舊邸なるべしといへり。

○備中町

元祿九年の地子町肝煎裁許附に、備中上<sub>テ</sub>地町とありて、舊名は備中上<sub>テ</sub>地町といへり。後に略稱して備中町と呼びたるなるべし。按ずるに、此の地邊は、昔は都て岡嶋備中守の下邸なりしかど、後分家して岡嶋氏の家祿減少し、下邸

地内上<sub>テ</sub>地と成りたるを以て、地子地と成し、上<sub>テ</sub>地町と町名を立てたるならん。

○岡嶋備中守下邸

延寶の金澤圖に岡嶋備中守下邸を次の如く記載す。按ずるに、岡嶋氏の元祖備中守一吉は、一萬千七百五十石を賜はり、人持組頭を勤め、元和五年卒す。其の子備中一元、父の遺知を相續し、人持組頭を勤め、寛永五年歿す。一元に數子あり。長男内膳長春へ配分知三千石賜はり、二男兵庫一宗へ配分知千石賜はり、三男市郎兵衛一陳家嫡に立ち家を繼ぎ、遺知之内五千石賜はり、宗家と成り、四男五兵衛一信配分知千石賜り、五男甚七郎重治配分知千石、後五百石加恩して千五百石賜はり、各別家を立てたり。さて宗家市郎兵衛一陳明曆元年歿し、其の子備中元爲家を繼ぎ、遺知五千石を賜はり、市郎兵衛と改稱し、正徳元年歿す。其の子市正元直家を繼ぎ、遺知故の如く賜はり、源左衛門と改稱し、享保元年歿す。無子、同姓兵右衛門元般の長男元庸を嗣子となし、遺知の内四千石を賜はり、藏人と稱し、同九年廿四歳にて歿す。其の子圓次郎一清、同年二